



Title	『フランク王ダゴベルトゥス伝』における社会三分論
Author(s)	江川, 温
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1982, 15, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47997
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『フランク王ダゴベルトゥス伝』における社会三分論

江 川

溫

—

人間の社会が祈る者、戦う者、労働する者という三つの職分集団から成っているという理論が、ヨーロッパ大陸において明確な形で発現してきたのは一一世紀初頭のことであった。ラン司教アダルベロンの『ロベール王に捧げる歌』⁽¹⁾(以下、カルメンと略記)、カンブレー司教ジェラルルの伝記の中に書きとめられた彼自身の説教がその二つの代表例である。彼らの理論は単に後のいわゆる三身分論の淵源として注目されるばかりではない。多様な職業集団が相互に奉仕しあうことによって有機体としての社会が存続するという中世後期のモラリストたちの社会観の基礎概念も、こうした一一世紀三職分論にその起源を求められているのである。⁽³⁾これらの思想的問題と並んで、こうしたイデオロギーの出現と一一世紀フランス社会の封建化との関係はどのようなものであるかという社会史的問題提起もまた可能である。こうして近年幾人かの研究者が一一世紀三職分論の成立要因や性格に関心を寄せ、論争を展開しているのである。

筆者は別稿においてラン司教アダルベロンのカルメンをとりあげてその内容を分析し、それに基づいて三職分論の起源、その機能ないし目的について概観を試みた。⁽⁴⁾そこでの結論を要約すると次のようになる。①三職分論の形式上の起源は、おそらく印欧語族の古代に一般的に見られる神話的世界観および王権論——神々や人間集団のうちに主権、軍事、生産の三機能を認め、また王を三機能の統合者とする——の内にある。②それが九世紀から一一世紀の西ヨーロッパにおいて、キリスト教的世界観の中に統合されつつ一個の社会理論として再生・復活したのは、生産労働に対する評価の高まりと民衆運動の活性化を契機としてである。③三職分論の機能ないし目的について、一般的に王権のイデオロギー的強化と規定するルゴフの説をそのまま受け容れることはできず、これについては個別の三職分論についての精密な歴史的検討がまずもって必要である。以上の三点である。しかし、もちろんこれはアダルベロンのカルメンの考察から得られた仮説的見通しに過ぎないのであって、その充分な実証のためには、他の三職分論の例についての研究の積み重ねが必要なこととは言うまでもない。

ところでアダルベロンのカルメンやジェラルルの説教と並んで、しばしば第三の例として引き合いに出されるひとつのテキストが存在する。成立時期については種々の意見があつて確定し難いが、一〇世紀末から一一世紀末までの間にロレーヌ地方で執筆された『フランク王ダゴベルトウス伝 *Vita Dagoberti(III.) regis Francorum*』(以下、ウイタと略記)がそれである。しかし、このウイタをアダルベロンのカルメンやジェラルルの説教と同類の三職分論史料として扱うべきか否かについては、Cl・カロツィとG・デュビイの間に意見の対立が見られる。⁽⁶⁾この見解の相違は、史料それ自体についての性格規定のレヴェルと同時に、三職分論一般の性格をどう把握するかという史観のレヴェルにも関わっていると見ることができると言える。そこで本稿では、まずこのウイタについてR・フォルト

の研究なども参照しつつその内容を概観し、カロツツイ、デュビイの見解を対照して問題点を明らかにした後、筆者のこの史料についての考えを述べてみたい。ここでは自ずから筆者自身の三職分論史観が問題となるわけであり、そこにおける結論は先述の別稿における仮説的見通しと深く関わってくることになる。

二

ウイタは一種の聖者伝である。フォルツによれば、⁽⁸⁾聖王ダゴベルトゥスに対する信仰はストウネイ・シウル・ムーズ（現ムーズ県ヴェルダン郡ストウネイ）の聖レミギウス礼拝堂を中核として成立したものである。ここには六七九年にストウネイで暗殺されたアウストラシア分国王ダゴベルトゥス（いわゆるダゴベルトゥス二世）が埋葬されていた。王の死後、彼に関する伝承はトリエル司教区の諸修道院に保持され、またアルザス地方では同名の祖父ダゴベルトゥス一世に関する豊かな伝承と結びついて発展した。敬神の念厚く悲劇的な最期を遂げた王への追憶は、このような伝承の中で、彼に殉教者、聖者の相貌を付与していったものと考えられる。

八七二年、西フランクのシャルル禿頭王はストウネイを訪れた。⁽⁹⁾ウイタ及びゴルツエ修道院文書集の一節によれば王はここで教会堂を拡張し、ダゴベルトゥスの棺をそこに安置するとともに、この教会に律修参事を置いて聖務を行わしめるよう命じた。さらに彼の死を記念して毎年一二月二三日に聖ダゴベルトゥス祭を行うことが定められたという。この祭儀の存続は一〇世紀末の史料によっても確認される。西フランク王ロテールの妃エンマの祈禱書に付せられたカレンダーには「王にして殉教者たる聖ダゴベルトゥスの一二月二三日」との記載が見えているからである。⁽¹⁰⁾

この聖者信仰の次の段階を画する事件は一一世紀後半に起こる。一〇六九年、ストウネイを領有していたバス・ロレーヌ公ゴドフロワ・ル・バルビュは、教会改革政策の一環として、ストウネイに置かれていた律修参事会をベネディクト系の小修道院に変換し、ゴルツェ修道院から修道士を招聘した。この時注目されるのは教会の名が既に「聖レミギウス教会」ではなく、「聖ダゴベルトウス教会」に変わっていたことである。いつこの改名が起きたのか詳かではないが、既にダゴベルトウス祭儀こそが典礼の中心となっていたことを窺わせる。以降、聖ダゴベルトウスの祭儀は一六世紀に至るまで、ストウネイ及びヴェルダンで存続していたといふ⁽¹¹⁾。

われわれが当面の問題としているウィタはこうしたダゴベルトウス信仰の展開の中に生まれたものであるが、正確な成立時期の確定は困難である。それが八七二年のシャルル王によるダゴベルトウス祭の設置を記していることからこの時点より後に成立したものであることは明らかであり、また一二世紀の二つの写本が最古のものとして知られていることから⁽¹²⁾、原本がそれ以前に位置づけられるべきことも明瞭である。この時間幅の中でフォルツは成立時期を一一世紀後葉に求める。ダゴベルトウスのランスでの戴冠の記述はランス大司教の聖別・授冠特権の確定を反映しており、また王推挙における個人的能力評価の件や、とりわけ俗人が不正に横領していた財産を王が教会に返還させるというパターンのエピソードの繰り返しはグレゴリウス改革時代の雰囲気伝えるものだと考えるのである。とすれば一〇六九年のバス・ロレーヌ公ゴドフロワによる、ストウネイへのゴルツェ系修道士の導入はウィタ成立の契機ではなかったかという推測が導かれる。かくてフォルツはウィタの匿名の作者をその当時のゴルツェの修道士に求めたのである⁽¹³⁾。これに対し、F・グラウスは一〇世紀末を成立時期と考えているようであるが⁽¹⁴⁾、筆者は彼の著作を参照し得なかったため、その論拠を詳かに知り得ない。しかし後述のカロットイ、デュビーのそれぞ

れの立論からも明らかのように、成立時期の問題は内容解釈から推定する他には決め手を欠く状況である。われわれもここで内容の検討に進んでゆかねばならない。

ウィタの作者は序文において著述の目的を「至福なる殉教者（ダゴベルトゥス）に仕える兄弟たちが、かの祭儀の日に読誦するに相応しいものを何か持つように」⁽¹⁵⁾ということであると述べる。すなわちこの聖王伝は八七二年以降毎年開催された聖ダゴベルトゥス祭に用いる目的で執筆されたものである。このことは他の史料からも推定できる。一七世紀にこのウィタを刊行したヴィルテミウスは、ストウネイのウィタ手稿の中に本文と並んで韻文で八八行からなるレジュメが存在するのを見出し、それを本文と併せて刊行している。⁽¹⁶⁾この韻文は本文の主要なテーマを漏れなく繰り返しており、祭儀の際の読誦により適格的な形態として本文を作り直したものと考えられるのである。公衆に向かって読誦するための著述という性格は、内容理解のための重要な鍵を提供するものである。

しかし、作者はウィタに着手するに当たって重大な困難に直面する。その時点では、ストウネイに祭られているのがダゴベルトゥスという名の殺害された王であるということ以外には何ら詳しい資料は存在していなかった。フォルツは、作者がメロヴァンジャン期の様々な史料を繙きつつダゴベルトゥス像の再構成に迫ってゆく過程を次のように推測する。⁽¹⁷⁾件のダゴベルトゥスがバリのサン・ドニ修道院に眠るダゴベルトゥス一世でないことは明瞭であった。シギベルトゥス王の子ダゴベルトゥス（すなわちダゴベルトゥス二世）は彼が参照し得た『フランク史書』などの記述の限りでは、宮宰グリモアルドゥスのクーデターによってアイルランドへ放逐されたことしかわからなかった。⁽¹⁸⁾彼が後にフランク王国に戻って王位に就いたこと、ストウネイで暗殺されたことを明らかにする『聖セラベルガ伝』『聖ウィルフリドゥス伝』などを彼は参照しなかったのである。とすればストウネイに埋葬されている

のは七一一年から七一五年にかけてアウストラシア、ネウストリア分国王であったダゴベルトウス若年王（三世）以外にはあり得ない。作者は『フランク史書』の中にダゴベルトウス若年王は病死したとあるのを見たとする（¹⁹）が、これを無視する。何しろストウネイの聖ダゴベルトウスは殉教者であるはずであり、またそうでなければならぬのだから。

かくてダゴベルトウス二世は、ウィタにおいては完全に三世にとり換えられる。さらにダゴベルトウス三世に関する史料も聖殉教者の事績を描く材料としてはあまりに乏しいので、作者はダゴベルトウス三世の同時代の、または異なる時代の様々な史料からその断片を剽窃し、つぎはぎ細工を重ねて全くの虚伝を作り上げるに至るのである。彼が材料として用いたのは主に『フレデガリウス年代記』『フランク史書』『メッス年代記』『聖ワンドリュ修道院長事績』などであるが、王個人のポートレート描写においては『ダゴベルトウス（一世）治績』やアインハルトの『カール大帝伝』までもがひき写されている。王の「殉教」を物語る第二章に至っては、パウルス・ディアコヌスの『ランゴバルト族史』におけるフランク王グントラムヌス殺害に関するエピソードがそっくりそのまま利用されているのである。「ここに語られることに信を置いてほしい」とこの作者は度し難い無邪気さで訴える。「誠実な人びとの証すところによって知った以外のことは何ひとつ書かなかつたと知ってほしい」⁽²²⁾

しかしこのフィクションとしての聖王伝の中に、われわれのテーマにとって重大な関連を持つ叙述が挿入されている。まずそれは、王の即位後実現された完全な平和の世界を描写する第四章に現われる。「フランクの民は、ダゴベルトウス王の治世にあって横溢するばかりの平和を樂しみ、全てが各々の位階（Ordo）に満足しつつ、自らの欲するがままに生きることができた。聖職者の位階は適切な時刻に全能の神に讃美歌を捧げ、多様な奉仕を以って

王に仕えたのである。農民の位階もまた全き喜びと共に自らの土地を耕し王に感謝を捧げたのであるが、それは彼が自らの領土に平和を実現し、穀物の豊かな実りによって彼らを充足させたからである。貴族の若者たちも同様に先祖の習いに従って、定められた時には獵犬と鷹の遊びを大いに楽しんだのであるが、それによって神のための行いから遠ざかることもなく、貧しき者に喜捨を行い、苦しむ者を助け、寡婦と孤児に力を貸し、裸の者に衣服を与え、旅人や入るべき屋根もなく放浪する者を引き取り、病者を訪ひ死者を埋葬したのである。実際、狩獵の習いというものはかかる善行を積む人びとにとっては何ら徳の妨げにはならないと信じられるのである」⁽²³⁾

この文章の中にみられる「穀物の豊かな実り」については次の第五章でさらに具体的に説明される。作者は王の奇跡のひとつを紹介して次のように云う。「ダゴベルトゥスが戴冠式を終えてランスを出発すると」かの地の村人たちが彼の前に現われ、御自らの手で種を蒔いて下さるようにと懇望した。寛大この上もない王はもちろん懇請者たちの願いをききとどけ、小麦の種を手にとつて傍の村人たちに属する土地にそれを蒔いた。主はダゴベルトゥス王の願いに応じてこの種子を豊かに潤されたので、それはこの地方で蒔かれた他の小麦よりも早く、異例な成熟を示した。かくてその年は全能の主が非常なる豊穰をこれらの人びとに与えられたので、主がこれを恵まれたのはダゴベルトゥスの徳の故であるということを誰も疑い得なかつたのである」⁽²⁴⁾

次に末尾近く第一章において聖ダゴベルトゥス祭の由来を述べ、全ての人びとが彼を崇敬すべき理由を挙げている部分が注目される。「されば全ての世俗の権力者は最高の帰依心を以つて至聖なる殉教者ダゴベルトゥスを崇敬すべきである。というのも全ての者の王である神はかの君を自らの民の上に立て、長期にわたつて王国の平和の実現者として守り給ひ、その後には殉教の勝利とともに天人の王国へと導き給うたからであり、そこでは彼はそれ

以降天使の軍団に加わり、壮嚴なる使徒の座を与えられ、紫衣を纏える殉教者の集団に数えられ、信仰告白者の純白の座を占め、処女の貞潔の褒賞すら享受することになったからである。また聖職者の位にあるものもまた、なべて彼を尊ぶべきである。というのも王は天においては『汝はメルキセデクの位階に基づき、永遠に聖職者である』と云われているものに一体化したからであり、その聖職者は彼のために天使とともに讚美歌を歌っているからである。また更に、価値ある仕事に従事している農民たちも王を崇拜すべきである。というのも土地からの豊かな実りというものは王のとりなし、彼の至上の徳を介して農民たちにもたらされるからである。一介のブドウ作りといえども、全精神力を傾けて件の聖者に封臣としての勤めを果たすことを怠るべきではない。彼は自らの愉快的労働に際して件の聖者を援助者とすることができのだから⁽²⁵⁾」

かくて地上の社会を構成する三つの位階は、聖王存命時にあつては彼の實現した平和の中で完全なる調和を保ち、王の死後はそれぞれ王との共通性や王の加護を理由としてこの聖王崇拜に結合さるべきものとされる。聖王は天上からこの三つの位階に幸福を授け続けるのである。もちろんこうしたテーマはウィタの作者が多くの材料をとり入れたメロヴァンジャン、カロランジャン史料にはみあたらないものであり、明らかに別の起源を有するものである。果してこれはアダルベロンのカルメンやジェラルルの説教のテーマとどのような関連に立つものであろうか。

三

カロツツイはこの聖王伝における三位階のテーマはアダルベロンやジェラルルのそれと基本的に同一であると考え⁽²⁶⁾。ダゴベルトゥス王が生前地上に實現した平和は超越的性格のものであり、カルメン一三一—一九行における口

ベール王即位後の平和と⁽²⁷⁾同じく、再びこの地上に戻ってくるのではないユートピアである。しかもそれは天上の世界と完全な照応関係に立つものである、そのような平和のうちに三位階は調和的に共存しうるのである。さらに王は貴族の中の第一人者であり、また司祭としての性格を併せ持つといわれる。第三位階たる農民に関しては、王は奉仕者・助力者ではあるが資質の共通性は持たない。これらは全てアダルベロンにとつての「あるべき王権」と共通した性格である。⁽²⁸⁾

もし相異点を挙げるとするならばウイタにおいては第二位階たる貴族の「戦闘」が直接には賞揚されていないことである。しかしこのことは、ウイタが聖王のもとで実現された完全な平和の状態を描写するという目的、および平和の殉教者の功德を説くという目的を持つてゐることから説明される。完全な平和の下に戦闘は存在し得ないからである。現に王その人は即位以来幾多の戦闘を勝利に導いた武勇の人として現われて来ている。ウイタは「神の平和」運動に対置されるような「王の平和」のイデーを賞揚しているのであつて、ここに再びアダルベロン、ジェラルとの共通性が見出しうるとカロツツイは云うのである。

ウイタについてのカロツツイのこのような見解は彼の九——一世紀三職分論に関する理解の仕方と深く関係している。彼にとつてこの時期の三職分論とは何よりもまず空想的王権論、空想的平和論なのである。三職分論は彼の考えによれば、印欧語族の神話的世界観と神話的王権論が形を変えキリスト教化されて復活したものであり、それは一世紀初のフランスにあつては王権論再建のための道具だったのである。⁽²⁹⁾三つの職分の調和による平和をもたらす王権のイデーはこうして一個の政治思想となる。しかし一方で、理想的な王権による平和の構築が既に不可能事であることをアダルベロンもジェラルも匿名のウイタの作者も熟知していた。平和は切望されるものではある

が、地上においてはついに到達しえないものである。かくて平和のユートピアは遠い過去ないしは天上のイエルサレムの像として描出されることになったとカロツツイは考える。

こうした内容理解の上に立ち、彼はこの聖者伝の成立時期、成立事情へも筆を進める。彼はまず、ここで挙げられている三位階の中に修道士に対する言及が全く見られないこと、第一位階がきわめて具体的に「聖職者 *sacerdos*」とされていることから、作者は修道士ではなく司祭であろうと推定する。すると著作時期はストウネイの参事教会が小修道院に変えられた一〇六九年以前と考えられる。さらに、作者は聖王としてのダゴベルトウスの奇跡を列挙しているのであるからして、もし成立時期が一〇五九年のフィリップ一世の戴冠以降であれば、既に王の超自然的力の現われとして定式化していた療癒治療力のエピソードが省かれることはなかったであろうし、M・ブロックが考えたように王の奇跡的治療力の信仰がロベール王時代にまで遡るとすれば、⁽³⁰⁾こうしたエピソードを欠くウィタの成立時期は一〇三〇年代以前である可能性が強いとカロツツイは考える。

他方でウィタのテーマとアダルベロンやジェラルとの結びつきを重視するカロツツイはこれらを繋ぐ輪としてロレーヌの貴族家門アルデンヌ家に注目する。アルデンヌ家はカロランジャン血統を引く名門で一〇世紀後半からロレーヌでめざましい勢力伸長を遂げた。ラン司教アダルベロンはこの一門の人であり、カンブレール司教ジェラルの母エルマントルドもまたそうである。この家は九八七年にストウネイを領有するに至った。一一世紀半ばのバス・ロレーヌ公で、ストウネイにゴルツエ系修道士を導入したゴドフロワはエルマントルドの甥に当たる⁽³¹⁾。ウィタのテーマとアダルベロン、ジェラルのそれとの親近性を考える時、ウィタはアルデンヌ家の強い影響力下に作成された可能性が強い。しかもアルデンヌ家が聖なる先祖としてダゴベルトウスを賞揚しようとしたらしい形跡

が、一二世紀のウイタの手稿のひとつに付された系図から見てとれるのである。かくてカロツツイはウイタの成立時期を、アルデンヌ家がストウネイを領有した九八七年から一〇三〇年代の間と推定するのである。すなわちウイタはアダルベロンのカルメンやジェラルルの説教と時間的にも接近させられたわけである。

これに対してデュビイはフォルツと同様、ウイタは一〇六九年以降、すなわち修道士がストウネイに入った後に成立したと見る。⁽³²⁾ まず王の奇跡的治療力の問題に関して言えば、ストウネイを訪れる巡礼は聖ダゴベルトゥスに病の治療を求めたのではなく豊穡を求めたのであって、ウイタはそれを反映しているに過ぎないと彼は考える。この問題については筆者は後により詳しく検討したいと思う。いずれにせよカロツツイが挙げる奇跡的治療力の問題は、デュビイにとつては成立年代の論拠たり得ないのである。次に彼は、カロツツイが強調することく、アルデンヌ家に先祖に聖者を求める意図があり、それがウイタの成立に関係しているであろうことを認める。しかし彼は、一〇二〇—一三〇年代にはアルデンヌ家出身のロレーヌ公たちはドイツ王と対立関係にあったが故に、⁽³³⁾ 君主を称揚するような著作の執筆を勧めることはあまりありそうもないと云う。筆者にとつてこの反論はやや理解に苦しむところがあるがここでは深くはたち入らない。要するに彼はむしろゴドフロワ・ル・バルビュやその女婿ゴドフロワ・ド・ブイヨン治下に作成されたと見る方が了解し易いと主張するのである。

かくてフォルツの、一一世紀後葉にゴルツエ修道院で成立したという説を支持するデュビイは、カロツツイの最大の論拠たる、ウイタにおける修道士の不在の問題に対しては次のように答える。今やストウネイの主となったゴルツエ系修道士はダゴベルトゥスの聖遺物を保持し、それによって巡礼をひきつけている。従つて彼らは修道院から見て外の世界に存在する集団——そのみが巡礼の主体であるのだが——に語りかけているのである。その外の

世界に修道士の姿が見えないのは何ら怪しむに足りない。

このようにウイタの描く世界を「修道士から見た外の世界」として把握する彼にとつては「祈る者」との強い自己認識の上に立つアダルベロンやジェラルルの三職分論とこの聖伝のテーマとは本質的に異なるものである。アダルベロンやジェラルルにあった現在の社会の批判とその改革、あるべき秩序への復帰という主張はウイタには全く見られない。現世の秩序の問題はこれの関心の外にある。従つてカロツツイが主張するような、「神の平和」に對抗するような「王の平和」のイデーは、デュビイによればこの著作には認められないことになる。

ウイタのプロパガンダの対象は主として農民にある。農民はひとつの「位階」を与えられるまでに高められ、価値ある仕事を為すものと呼ばれている。しかしこの「位階」が他の位階に提供する奉仕については何も語られていない。従つてアダルベロンに見られるような領主制に対する弁証も、またそれに対する批判もここにはない。貴族（の位階）に関していうならば、戦闘による他の社会構成員の保護という奉仕については一言も触れられず、狩猟と慈善について語られるのみである。ここでは各職分集団の相互奉仕という、アダルベロンやジェラルルの社会理論の鍵概念が完全に脱落しているのである。さらに聖職者についていえば、これを王に完全に従属しこれに仕えるものとして点で、アダルベロンやジェラルルの立っていたグラシウス主義の伝統とは大幅に異なっているとデュビイは云う。要するに彼の見るところ、この著作のイデーはアダルベロンやジェラルルのそれと同じ資格で社会思想と呼びうる種類のものではないのである。

このようなデュビイの考え方を規定しているのは、三職分論とは、一一世紀初のフランス社会の封建化に伴う様様の危機に直面した北仏司教たちがうち出した現世的政治・社会思想であるという見方である。そこでは現実の王

権、現実の教会、現実の領主制に対する問題意識が不可欠の要素であった。ウイタは、こうした司教たちの世界観に對立し、現世の放棄の中に最高の聖性を認め、また職分秩序を相對化する傾向を持つところの修道士的世界観⁽³⁵⁾の産物である。あえて分類するならばウイタの社会論はアボン・ド・フルーリのそれと同じく、修道士を聖職者・貴族・農民の上に置く四身分論に帰着することになる。

ウイタの中で用いられている現世社会についての形象はたしかにアダルベロンやジェラルルのそれと似ていることをデュビイは認める。しかし前者の社会形象が後二者とは異なる歴史的文脈に属するものである限り、彼にとつてこの類似は何の意味も持たないのである。カロツツイが形象の類似性から出發してこの三つに共通する思想を發見しようと努めるのに対し、デュビイは現世的政治・社会思想というクリテリウムを用いてアダルベロンやジェラルルの思想とウイタのそれとを切斷したとも云えよう。ではわれわれはウイタの性格を、そしてまた一一世紀三分論との關係をどう捉えるべきであろうか。

四

まず成立時期の問題について考えてみたい。これについては、諸家の努力にも拘らず、決定的論証は今のところ存在していない。フォルツの論拠にしても反論は可能であり、カロツツイの論拠のうち時代の下限を求めた部分についてはデュビイの反論であらかた崩れ去ったといえるだろう。そのデュビイにしてもポジティブな論拠を新たに提出できたわけではないのである。ただここで考えるべきはウイタの作者が相当豊富な資料を手元に置いて著述を進めているという事実である。これは少くとも参事会教会の中だけで執筆できるものではないと考えられる。当時

これだけの写本を備えた場所ということになれば、ゴルツェ修道院の写本室スクリプトリウムがどうしても想起される。もしこの推定が正しければ、ストウネイにゴルツェ系修道士が入った一〇六九年以降の成立を考えることはきわめて自然である。

次に内容の性格に関して言えば、まず認めなければならないのは、ウイタの本質はアダルベロンやジェラルルにみられたような現世的社会思想とは異質のものであるということである。この点に関するデュビイの主張はほぼ完全に肯定しうるものである。ダゴベルトウス王の平和は、遠い昔に失われた黄金郷の平和として語られているのであって、これを「神の平和」に対抗する一個の政治理念だとするカロツツイの主張はいささか牽強附会に過ぎるというべきであろう。アダルベロンやジェラルルの場合は、たとえ完全な平和が天上のものでしかないとしても現世はできる限りそれに向けて努力すべきものであり、従って「神の平和」運動というあるべき秩序に反するものを排斥することは現実の中での目標であつた。同様に農民、貴族、聖職者、王が現実の中でいかなる関係をとり結び、またそれはいかにして理論的に正当化しうるのか、というアダルベロンやジェラルルにとつての問題意識は最初からウイタには欠如している。これはこうした教会知識人の関心からは遠い所で書かれているといわざるを得ない。

しかしながら他方で、二度にわたつて社会を聖職者、貴族、農民の三位階から成るものとして描写しているのは単なる偶然とは考えられない。しかも、たとえばカロツツイがアダルベロンから剔出した王と三職分集団との関係のパターンが、このウイタの内にも見出されることもまた事実である。王はその一身のうちに「貴族の第一人者」⁽³⁷⁾「司祭」「豊穰をもたらす者」という性格を兼ね、また王の実現した平和の中で聖職者、貴族、農民の三つの集団の調和が達成されるのである。われわれはやはりカルメンとウイタという二つの著述の根には何らか人間の社会に

ついでに共通のイメージが潜在しているのではないかという印象を拭うことができない。アダルベロンと同一の社会イメージから出発しながら、それを現世的社会思想の方向へではなく、むしろ寓話的方向へ発展させていったのがウイタの匿名の作者ではなかったであろうか。ウイタが現世的社会理論の著作ではない以上、「修道士から見た外の社会」＝三位階社会に修道士の位階を加えて社会四分論であると性格づけることにはさしたる意味はないように思われる。ここで問題となるのはその「外の世界」がどういうイメージで構成されているかということである。

このように考える時、カルメンとウイタに共通する社会イメージは、やはり印欧語族的三職分論の系譜の中にその出発点を求めるのが適切であると思われる。少くともこうしたものがカルメンやウイタの著者にヒントを与えていると見て良いのではなからうか。印欧語族的三職分論はイングランドではアルフレッド大王の著述を介してアエルフリク、ウルフスタン等の三職分論の形成の酵母となった。こうしたイングランド三職分論の影響がロレーヌへ及んだ可能性も大きい。しかし印欧語族的三職分論を伝承文学の形で豊かに保持していたアイルランドからの直接の継受の可能性もまた存在する。

M・ルーシュによればアイルランドでは九世紀にも異教的三職分論が聖者伝の中に継承されていた。『聖パトリクス伝』や『聖ブレンダヌス伝』がそれである。『聖ブレンダヌス伝』においてはこの聖者は航海の過程でやがて辿り着く島の住民について予言を行うのであるが、そこに登場する三種の民はそのまま生産者、戦士、祭司のシンボルである。このアイルランド起源のテキストは九〇〇年から九五〇年の間にメッスのゴルツェ修道院かトリエルの聖マクシミヌス修道院で新たに文書化され、そこから一〇一一世紀中にバイエルンからノルマンディーまで急速な普及を見た。年二度の聖ブレンダヌス祭のおり、これは公衆の面前で読誦されたものであることから見ても、

三つの職分から成る社会のイメージは決して古文書中の秘義にとどまっていたものではない。さてアルデンヌ家とゴルツエ修道院はかなり深い関係にあったし、トリエルの聖マクシミヌス修道院は一一世紀にはこの家の一族がアヴェを勤めていた。⁽⁴⁰⁾つまりアダルベロンもウイタの匿名の作者も、そしておそらくジェラールもこのアイルランド起源のテキストをよく知っていたと思われるのである。

かくてわれわれはウイタの中の社会三分論の少くとも起源のひとつを推定することができた。しかし重要な問題はその先にある。何故この匿名作者は、ウイタのモチーフのひとつとしてこの印欧語族的三職分論の形象を選んだのであろうか。カロランジャン時代の君主理想は武勇によつて外敵を防ぎ、正しき裁きを行い、教会・聖職者を厚く保護し、貧者、弱者に救済の手を差しのべるといふものであった。そうした理念によつて描かれた国王頌辞のテキストはウイタにもふんだんに利用されている。これにそれまでの聖者伝によつてパターン化されたいくつかの奇跡と殉教のドラマを加えれば、一応の聖王伝が形を成したであろう。しかしその場合には、かかる聖王が支配する社会は教会人、戦士・貴族、および「貧者・弱者」から成るものとして構想されることになる。実際カロランジャン期の史料にはそのような社会認識を示すものがあつた。⁽⁴²⁾

ウイタがこのような社会論に立脚することができなかったのは、一口で言えば、王による豊穡の奇跡を導入したからである。これはそれ以前の聖者伝にも国王頌辞にも見られない新しい要素である。⁽⁴³⁾作者がこの要素をウイタに加える以上、そうした聖王の徳に対応する社会像は「貧者・弱者」ではなく「生産者」をうちに含むものとして描かれざるを得ない。かくて全体を統べるモチーフが一方では教会人、戦士・貴族に、一方では生産者に結合した聖王として構想される時、印欧語族的三職分論の社会イメージが想起されたのは当然であらう。では何故豊穡の奇跡

は必要欠くべからざるものだったのか。

国王Ⅱ豊穰祭司という思想は世界の農耕民族に広く見られる。J・G・フレイザーは大著『金枝篇』第六章においてこのような信仰の現われの例を豊富に挙げている。⁽⁴⁴⁾極東においても中国や日本の君主がそのような性格を持つことは周知の事実である。⁽⁴⁵⁾印欧語族的三職分論もこうした思想を内包しているといつてよいであろう。王は三職分の統合者として表象されることが多いからである。⁽⁴⁶⁾しかしこの三職分論の潜在が推定されるにも拘らず、中世ヨーロッパで国王Ⅱ豊穰をもたらしものという思想が国王頌辞として表現されている例は皆無に等しい。こうした信仰の存在が瞥見される例はある。一〇八一年に皇帝ハインリヒ四世がルッカ近郊に達した時、農民たちは皇帝の衣服に触れることによって豊穰を得ようとしたという。しかしこれを伝える史料ではその行為は明らかに非難の対象になつて⁽⁴⁷⁾いる。また一二世紀のデンマーク人史家サクソ・グラマティクスは、デンマーク王ヴァルデマール一世が一六四年にドイツを旅行した時、当地の母親たちが子供を、農民たちは小麦をそれぞれ王に触れて貰いたがつたと語⁽⁴⁸⁾っている。これはドイツ人の信仰というよりサクソ・グラマティクスを含むデンマーク人の信仰と解すべきであろう。しかしサクソがこうした信仰に共感を持っていたとしても彼は建前上、これらの母親や農民たちを「迷信深い田舎者たち」と呼ばざるを得なかつた。⁽⁴⁹⁾中世カトリック世界の辺境デンマークにしてこのような抑制が働いていたということは、古い国王Ⅱ豊穰祭司という異教的信仰が教会に完全に抑圧されていることを示している。とすれば、こうした思想が正統的な国王頌辞に登場しないのは当然である。

そうした状況を前提とする時、このウィタの中の王の豊穰奇跡の扱いにおけるオリジナリテイが明らかにになる。作者はまず王の役割をキリスト教の神への懇願者という形で明確化することによって古い豊穰祭司信仰をキリスト

教化した上で、これをダゴベルトウスの主要な奇跡のひとつへと押し出しているのである。豊穰をもたらす力は王一般のカリスマ性ではなく、ダゴベルトウスの聖人としての特質に求められることになる。

しかしこのような意図的操作をしまで、この奇跡譚をウィタの中に挿入した作者の意図はどこにあったのか。ここでわれわれはこのウィタが何よりも祭儀に参集する公衆に読誦するためのものであり、おそらくは公衆に聖ダゴベルトウスの利益を解説するための手引であったことを想起せねばならない。さらに一〇——一世紀は西ヨーロッパにおいて大衆的な規模での聖者崇拜、聖遺物崇拜が広まった時期であり、ストウネイを含むロレーヌ地方はその先進地帯であったことを考え合わせねばならない。⁽⁵⁰⁾ こうした民衆的宗教運動の担い手は基本的に農民であった。

開墾と農業生産性向上の時代に生きていたこれら農民たちにとっては魂の救済、疾病の治療などと並んで収穫の問題が大きな関心事であったはずである。そしてストウネイの聖人は王であるが故に、人びとは心性の奥で豊穰の利益との親和性を意識したのではなからうか。誰かがダゴベルトウス王と豊穰とを結びつけた。それはウィタの作者であろうか、ストウネイの農民であろうか。われわれにはもはや知り得ない。しかしもし前者であれば、彼はそのことによって農民大衆をダゴベルトウスの祭儀に引き寄せようと企てたということにならうし、もし後者であれば、自生的な豊穰奇跡への信仰をウィタの作者が受容し、それを教義的に正統化したということになる。

ダゴベルトウスの祭儀に参集する農民たちに対してウィタは「価値ある仕事をするものたち」と呼びかけ、その労働を喜びに満ちたものだという。さらに彼らのために聖王が天上で神にとりなしを行い、豊かな実りを与えてくれると約束する。これに対し、祭儀の間の休業——これがなければ農民はストウネイに詣でることはできない——の規範を破るものにはたちまちに天罰が下るとも説くのである。⁽⁵¹⁾ デュビイはこの書を「農民に阿っている」とすら

云う。まことにその通りである。しかしその背景には、一〇世紀のロレーヌを皮切りにフランスに拡大していった民衆的宗教運動の活性化があったのである。かくてダゴベルトゥスは豊穡の聖者の相貌を帯び、それに理想の王としての像を重ね合わせる時、ウイタは印欧語族的三分論を内にとりこんでゆかざるを得なかったのではなかろうか。

アダルベロンのカルメンやジェラルルの説教とウイタの一定の異質性を前提した上で、なお社会イメージの共通性に鑑みて、筆者はウイタを一一世紀三分論の例のひとつに数えたいと考える。従ってウイタについても本稿冒頭の三つの仮説的見通しとの照合が必要であろう。①および②については多言を要しない。ウイタの三位階論のヒントはおそらくアイルランド起源の三分論の系譜のうちに求められるであろう。しかしそれが聖者伝のライトモチーフとして活用されるに至った契機は、一〇一一世紀の民衆的宗教運動そのものであったと考えられる。③について言うならば、ウイタが現実の王権のイデオロギー的強化とほとんど関係を持たないことはデュビイの指摘する通りである。ウイタの三位階論の機能ないし目的は、社会を構成する各層を聖ダゴベルトゥス崇拜に結合することには他ならなかったのである。

注

- (1) Cl. Carozzi, (ed.), *Adalberon de Laon : Poème au roi Robert*, Paris, 1979.
- (2) *Gesta episcoporum cameracensium*, MGH SS VII, pp. 485—487.
- (3) P. Michaud-Quantin, *Le vocabulaire des catégories sociales chez les canonistes et les moralistes du XIII^e siècle*, *Ordres et classes : Colloque d'histoire sociale*, Paris, 1973, p. 84.

- (4) 「ラン司教アタルベロンと『ロベール王に捧げる歌』——ヨーロッパ三職分論研究序説——」、『史林』六四卷四号、一—三五頁。
- (5) B. Krusch, (ed.), *MGH SRM II*, pp. 509—524.
- (9) Cl. Carozzi, «La tripartition sociale et l'idée de paix au XI^e siècle», *La guerre et la paix au Moyen Age : Actes du 101^e congrès national des sociétés savantes*, Paris, 1978, pp. 9—22 ; G. Duby, *Les trois ordres ou l'imaginaire du féodalisme*, Paris, 1978, pp. 209—214.
- (7) R. Foltz, «Tradition hagiographique et cult de Saint Dagobert, roi de Francs», *Le Moyen Age*, t. LXIX, 1963, pp. 17—35.
- (8) *Ibid.*, p. 17.
- (6) Dom Calmet, (éd.), *Histoire ecclésiastique et civile de Lorraine, II*, 1745, *Preuves* p. CCCXII 所収の部分に *Vita Dagoberti* の MGH 版の譯和 Krusch が引用。 *Op. cit.*, p. 521, n. 1).
- (10) Mabillon, *Annales*, 1739, I, p. 511 45 Krusch が引用。 *Op. cit.*, p. 521, n. 2).
- (11) Foltz, *op. cit.*
- (12) *Vita* に付られた Krusch 序文参照。 *Op. cit.*, p. 510.
- (13) Foltz, *op. cit.*, pp. 28—29.
- (14) F. Graus, *Volk, Herrscher und Heiliger im Reich der Merowinger*, Prague, 1963, p. 403 (但し筆者未見)。
- (15) *Op. cit.*, p. 512. ... ut unica habeat fraternitas beato famulans martyri parum quid ad legendum in eius die sollempni.
- (16) Krusch が序文の後に再録。 *Op. cit.*, pp. 510—511.
- (17) Foltz, *op. cit.*, pp. 21—28.
- (18) *Liber Historiae Francorum*, *MGH SRM II*, p. 316.
- (19) *Ibid.*, pp. 325—326.

- (20) *Gesta Dagoberti I* の『勅録』第6章、第7章 (pp. 515—516) に『Einhardi Vita Karoli Magni』の『第1章 (p. 513) に見えぬ』。
- (21) L. Bethmann & G. Waitz, (eds.) *Pauli Historia Langobardorum*, III, 34, MGH SS. rer. Langob. et Ital., pp. 112—113.
- (22) *Op. cit.*, p. 512. ... quo fidem dictis adhibeant, non me alia scribere sciant, nisi quae veratium expertus sum testimonio.
- (23) *Ibid.*, p. 515. Affluenti itaque et multiplici gaudentes Francorum populi quiete in Dagoberti regis tempore, omnes pro libitu suo agebant in suo ordine ovantes. Sacerdotalis quippe ordo tempore congruo psallebat ymnos omnipotenti Deo; militans serviebat regi suo multiplici obsequio; agricolarum etiam ordo colebat terras suas cum omni gaudio, beneficens ei, qui posuit fines suos pacem et adipe frumenti satiabat eos. Iuventus quoque nobilium iusta anticorum mores canum aviumque exultabat lusuibus certis utique temporibus, nec tamen cessabat a divinis actibus tribuendo elemosinas pauperibus, subveniendū in tribulationibus positīs, viduis et orphanis auxiliando, nudos vestiendū, hospites et sine tecto vagantes suscipiendū, infirmos visitando mortuosque sepeliendo. Talia etenim agentibus non obesse prorsus venationis creditur usus.
- (24) *Ibid.*, ... obvaverunt ei pagenses territorii illius, precantes suppliciter, ut manu propria dignaretur iactare semina. Illorum quippe deprecationibus annuens rex clementissimus, accepit sementem tritici in manibus et sparsit illud per circummantenium redditus; quod semen ita rigavit Dominus regis Dagoberti precibus, ut insolito more maturesceret citius quam aliud triticum, quod seminatū est in illis regionibus. Illo denique anno tantam frugum abundantiam tribuit omnipotens Dominus illis hominibus, ut nullus ambigaret, quod pro meritis Dagoberti hanc incolis terrae illius concessisset.
- (25) *Ibid.*, pp. 521—522. Veneretur itaque cum summa devotione omnis secularis potestas sanctissimum martyrem Dagobertum, quem Rex omnium principem statuit super populum suum et per tempora proluxa custodivit in

regno pacificum ac post cum martirii triumpho perduxit ad regna caelorum, ubi modo fruitur angelorum consortio, apostolorum sublimi solio, martyrum consessu purpureo, confessorum tribunali candido, virginum etiam castitatis bravo. Honoret illum omnino sacerdotalis dignitas, quia illi coniunctus est in caelis, cui dicitur : *Tu es sacerdos in aeternum secundum ordinem Melchisedech*, eique cum angelis ymnizat. Oportet preterea, illum prosequi digna exercentes opera agricolas, quoniam per illius interventum ac meritum optimum proveniet eis terrarum sufficiens fructus. Sordidus etiam vintor non negligat sancto prefato toto mentis nisu honoris obsequium reddere, quem adiutorem potest habere in suo hilari labore.

- (26) 《La tripartition sociale et l'idée de paix au XI^e siècle》.
- (27) Carozzi, *Adalbéron de Laon : Poème au roi Robert*, p.2.
- (28) Id., 《Les fondements de la tripartition sociale chez Adalbéron de Laon》, *Annales ESC*, 1978, p. 699.
- (29) *Ibid* ; *Adalbéron de Laon : Poème au roi Robert*, p. CXXXIX.
- (30) M. Bloch, *Les rois thaumaturges : Étude sur le caractère surnaturel attribué à la puissance royale particulièrement en France et en Angleterre*, Paris, 1961, p.38.
- (31) この家記については M. Parisse, *La noblesse lorraine XI^e—XIII^e siècles*, Lille et Paris, 1976, pp. 19—45, 84—849 参照。なお前掲拙稿八頁註②のマルティヌ家を紹介したもののでもなく、誤りがあるものの場を借りて訂正した。初代イェルサレム国王ボードワンはゴットロンの孫ではなく曾孫である。
- (32) Duby, *op. cit.*, pp. 209—214.
- (33) Parisse, *op. cit.*, pp. 39—45.
- (34) デュビイのアダルベロン・シエラル観は *op. cit.*, pp. 25—81, 155—205. に示されている。
- (35) *Ibid.*, pp. 214—251.
- (36) *Apologeticus ad Hugonem et Roberthum reges Francorum*, PL CXXXIX, col. 461—472.
- (37) *Op. cit.*, p. 513.

- (38) M. Rouche, *«De l'Orient à l'Occident : Les origines de la tripartition fonctionnelle et les causes de son adoption par l'Europe chrétienne à la fin du Xe siècle»*, *Occident et Orient au Xe siècle : Actes du IX^e congrès de la société des historiens médiévistes de l'enseignement supérieur public*, Paris, 1979, pp. 31—49.
- (39) 前掲拙稿五頁。
- (40) Parisse, *op. cit.*, p. 22.
- (41) 第六章 (pp. 515—516) における「馮かれたる者」の治癒はカロランゲン期¹の聖者伝にあわめて一般的である。J.-Cl. Poulin, *L'idéal de sainteté dans l'Aquitaine carolingienne d'après les sources hagiographiques* (750—950), Québec, 1975, p. 111. 第八章 (p. 516) の神明裁判も同様である。第一〇章 (p. 517) における王の杖が獄舎の戸を打ち砕く話も他の聖者伝を出典とするものではない。Folz, *op. cit.*, pp. 26—27.
- (42) Duby, *op. cit.*, pp. 121—127.
- (43) Folz, *op. cit.*, p. 27.
- (44) 永橋卓介訳、岩波文庫、一九五一年、一九〇—二〇三頁。
- (45) 中国については三田村泰助『黄土を拓いた人びと』、河出書房新社、一九七六年、一〇八—一五頁。
- (46) D. Dubuisson, *«Le roi indo-européen et la synthèse des trois fonctions»*, *Annales ESC*, 1978, pp. 21—34.
- (47) Rangerius, *Vita Anselmi*, *MGH SS XXX 2*, p. 1256. ランゲリウスはこう続ける。「みじめな者共には、王を愛するのあまり、キリストの愛が人に何を命じ、何を命じなかったかということも全て、わからなくなってしまう。」
- (48) M. Bloch, *op. cit.*, pp. 57—58.
- (49) *Ibid.*, n. 1).
- (50) 今野國雄『西洋中世世界の発展』、岩波書店、一九七九年、六五—七二頁。
- (51) *Op. cit.*, pp. 522—523.